

## 表現された色と形 ～Santiago Atitlánの子どもたちを中心に～

佐藤 仁美<sup>1)</sup>

### Color and the form expressed ～ Focusing on the expression of children in Santiago Atitlán ～

Hitomi SATOH

#### 要 旨

本研究は、織と色彩コラージュを通して、Guatemala Santiago Atitlánにおけるマヤ先住民の空間表現へのアプローチを試みたものである。筆者は、2017年に現地調査を行い、本学研究年報35号にて概要を、36号にイシル地方の報告を記した。本研究は、湖畔に位置するSantiago Atitlánを対象としている。

Santiago Atitlánは、アティトラン湖と火山といった自然豊かな土地で、原始宗教と、それをめぐっての虐殺の歴史があり、独特な文化が色濃く残っている。民族衣装のモチーフには、その土地にまつわる文化が織り込まれている。子どもたちの色彩コラージュ表現においては、他の調査地域に比べて物語性が強く、細かな表現がなされていた。特に、生活や周りの自然の中に豊かな感情が投影され、虹の表現が特徴的だった。また、視野の広さを感じた。

#### ABSTRACT

This study approached the space expression of the Maya indigenous people of Santiago Atitlán in Guatemala through textile and color collage. The author conducted a fieldwork locally in 2017 and presented its summary in *Journal of The Open University of Japan*, No. 35. The author also presented a detailed study of the Ixil district in *Journal of The Open University of Japan*, No. 36 in 2018. As a sequel to the previous two studies, Santiago Atitlán, which is located by Lake Atitlán, was chosen as the subject of this study.

Santiago Atitlán is rich in nature such as Lake Atitlán and the three volcanos, yet bears a primitive religion and a history of massacre over it. As a result, a unique culture has remained intact. In the folk costume, the motif regarding the culture of the area was woven in. In the color collage expressed by children, narrative characteristics were stronger than other areas that have been investigated, and more detailed expressions were observed. Particularly, rich feelings were reflected in their representation of life and nature, and the expression of the rainbow was particularly notable. In addition, it was observed that they have a wide field of vision.

#### 1. はじめに

約23のマヤ言語に分かれたグアテマラにおける民族衣装は、色と形により出身・年齢を見分け、互いのアイデンティティ確認手段の一つと位置づけられている。グアテマラ・マヤ先住民は、ある意味、衣装という視覚的手段を用いて、「相互に『目に見えるシグナル』を送り合うことによって集団間の境界を構築」(小泉, 1994) しており、民族間において、異なる文化を知り、それぞれの個を守りながら、交流・共存し

ていくために、多種多様な色と形を用いた民族衣装は、欠かせない存在となっている。

桜井(2006)は、先住民の女性の身に着ける衣装の柄や織は「目に見える言語」として各村落の出身を表し、民族衣装を纏うことは『沈黙の言語』として文化的レジスタンスを表現しているとし、小泉(1994)は、日常身につけている民族衣装を「第二の肌」と説く。マヤの先住民族は、人生の終わりを迎え、埋葬される際には、お気に入りの1着を纏っていくと、現地の方々から教えて頂いた。よいことも悪いことも、全てを抱えて向こうの世界に行くとのことである。自ら

<sup>1)</sup> 放送大学准教授 (「心理と教育」コース)

身につける衣は、日々の生活の中で、様々な時を刻みながら織られている。ここにも、「第二の肌」の意味を感じざるを得ない。土地にまつわる悲惨な歴史を背負うマヤ先住民にとって、その衣装の重要性は政治的であり、歴史的闘争や政治的抵抗のプロセスの中に位置づけられるとのことである。マヤ先住民が衣装を着けるということは、「他の手段を選ぶことができない状況下」での文化的抵抗としての政治的意味を持ち、「土地と織物を守ろうとしてきた」あらわれであり、「織物について語るのは、土地について語るのと同じ」ということである (Otzoy, 1992)。重層的で複雑な要素を抱えた「第二の肌」である民族衣装のあり方は、異文化の我々にとって、単なる芸術作品的好奇心だけで捉えるのではなく、見えない深層をも理解したうえで、大切に向き合う必要がある。

心理臨床の現場においても、クライアントの表現する色彩・形象にも、表現者の複雑な思いや歴史などが包蔵されている。媒介物としての表現ではあるが、表現者の内なるものの顕示が視覚的にあらわれたものであり、民族衣装のあり方と共通性を感じる。

筆者は、2017年のGuatemala現地調査において得られた、土地と織と色と形の関係を、放送大学研究年報第35号において、マヤ先住民における色彩コラーージュに用いられた色彩イメージについて、調査地域全体を概観し、放送大学研究年報36号にて、山間部のIxil地方に焦点を当てて報告した。色彩コラーージュ表現においては、調査全地域に共通イメージもありながらも、各地域に通底する独自の文化の影響が見られた。

本論では、湖畔の村Santiago Atitlánに焦点を当て、そこに表現された、通底するマヤの色と形にアプローチする。

## 2. Santiago Atitlánという土地と民族衣装

Santiago Atitlánは、グアテマラ南西部に位置する、ソロラ県（西：Departamento de Solola）にあり、サンペドロ火山とトリマン火山を湖岸に持つアティトラン湖南岸に位置し、湖畔町村の中でも比較的大きな村である。主にマヤ先住民が住み、元々、Chuitinamitという名のツトゥヒル（Tz'utujil）族の土地であった。Atitlánは、Tz'utujil語で「鳥の家」を意味する。その名のごとく、豊かな自然に多くの野鳥が生息している。この野鳥等は、女性の衣装であるウィピールや、男性のパンタロンに刺繍されている（図1-1、1-2）。

アティトラン湖は、周囲をアティトラン火山（3,537m）、トリマン火山（3,158m）、サンペドロ火山（3,020m）等の緑の山々に囲まれた世界で一番美しい火山湖として知られている（図2）。アティトラン湖畔には、各々異なる民族衣装や風俗を持つ先住民の村落が点在し、村間はボートによる湖上交通が主流である。この地域の自然・土地の情景は、ウィピールに表現されている（図3）。この村では、白地にストライプの入ったウィピールが有名で、色数豊富な刺繍模様

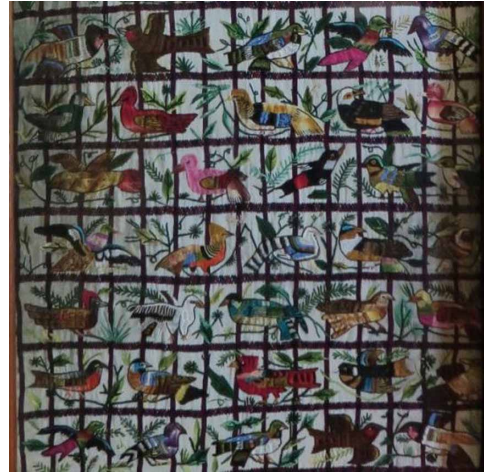


図1-1 Santiago Atitlánの野鳥を施した刺繍の一例



図1-2 Atitlánの衣装イラスト



図2 アティトラン湖

も見事であるが、特に、首回りに世界観が表れる。これは、首回りが一番大切なことを示している。首の部分は、アティトラン湖で、両肩の3つの三角は、湖のほとりの3つの火山を表している。見ごろ部分に繰り返



図3 Santiago Atitlánのウィピール  
首回りに刺繍された自然の情景と野鳥の数々

返される×××模様は、地域で古くから編まれているゴザ柄を象徴し、布全体に自然に生息するさまざまな野鳥を模している。首回りにぐるっと1周刺繍されている円は、宗教的意味合いも強く、マヤカレンダーであり、豊かさの象徴としてのモチーフにも値する。他の地域では、この円のモチーフ部分に通貨コインが模されていたり、実際にコインを縫いつけるというような直接的表現も存在する。マヤカレンダーは、時間の象徴でもあり、循環する時（1年）、または、一生をも象徴している（ドローレス、カルラ/小林、2017）。

織物の織りはじめは、人生の始まりであり、織りの過程は、日々の生活に値するとも言われている（リディア、2016、2017）。織り手は、グアテマラの方位にまつわる基本5色（赤・黒・黄・白・緑/青）を織り込み、ウィピール等を身につけるといことは、宇宙を身につける意識を持つといわれている（Hecht、2003）。

これは、日本の代表的染織家：志村ふくみ（2004）が、「着ることは“いのち”をまとうこと」であり、「織るといことは、架空の空間に物を作らなければ出来」ず「布を織りつつ絵をかいてゆくようなもの」、「経と緯が交差することによって、かたちになる…ものが成就するって人生も全てそう」「先天的なものと現在の自分の気持ちとがぱっとここで出会った時に、織物が一つ出来ていく。経糸はもって生まれたもの、緯糸はその日、その日の生きるあかし」に通じる。衣そのものが、纏うものでありながら、それぞれのマヤ先住民族の生そのものを象徴しており、切っても切り離せない大切なものである。

落合（2004）は、スペインによる植民地時代から現代もなお、衣装が女性により生活の中で織り続けられ、絶えることなく、口頭伝承的に受け継がれてきた



図4 Santiago Atitlánのコレテの絁模様の一例  
生活の事物が絁によりあらわされている。



図5 Santiago Atitlánのマシモン  
(2017年9月15日筆者撮影)

こと、「何がオリジナルかは問題でなく、『同じようなもの』を反復してつくり、更新していくことが大切」であること、「男性世界の属するピラミッド建設や石碑建立が減びてきたのに対し、女性が維持してきた織物の世界は、時代に柔軟に対応して織り継がれ生き延びてきた。織り継ぐと言うことは、時代時代の状況に深く根ざすことでもある」を説いている。

また、この地域では、女性の巻スカートにあたるコレテの布は、この地独特な絁で、男性が高機で織っている。この絁模様にも、人、国鳥であるケツツアル、マヤ神殿、道、蛇、トウモロコシ畑、雷、ゴザ、壺、マヤの心など、この地の日常を表す模様が織り込まれている（図4）。

宗教的側面として、Santiago Atitlánは、マヤ宗教の色濃く残る地域であり、守護神：マシモン（図5）が祭られている。実松（2016）によると、マシモンとは、「根底には古代マヤの『生命の樹』の信仰があり、

それがサンティアゴ・アティトランにおいて土着化し、アティテコ文化の祖霊となった」もので、正式名を「リラッハ・マム (Relaj Mam)」という「偉大な老人」を意味している。「マム」とは、「非常に古いもの」を意味し、「マシモンの遠い紀元を年の神『マム』神話に求めている。若い年の神である雨と風、そして稲妻の神々は、豊穡の洞窟において女性たちと交わり、その罰として年老い、死ぬ。そして新しい神々として復活」するとし、「死と再生の過程」を意味するという。マシモンは、夢のお告げによりピトの木という聖なる木で作られ、その名の原形であるマム・シモン (Mam Ximón/Mam: 老人・古いもの Xim: 縛られた) の意味通り、頭部は彫刻されているが、胴体は棒きれで、そこにぼろきれを何重にも縛り付けて胴体を形成している。筆者がシャーマンから教えていただいた情報では、「祈願に訪れる者が、色とりどりのスカーフを献上し、マシモンに縛り付けられる」「シャーマンに頼んでマシモンに願いを叶えてもらう際に、サテンのスカーフをマシモンに巻いてもらう」というものだった。実松 (2016) は、Santiago Atitlánにおいて、神託により作られたマシモンのピトの木は、マヤ先住民にとって宗教的にも、生活においても重要かつ大切な木で、マシモン由来の樹木信仰は、聖なる木にあることを説く。マシモンに関する伝説は数あり、様々な伝承があることもうかがえる。

### 3. 色彩コラージュの試み

2017年9月17・19日、通訳を介して主旨説明を行い、了承を得られたSantiago Atitlánの子どもたちに色彩コラージュ制作を体験してもらった。

方法：材料は、面積約346cm<sup>2</sup>の円 (直径21cm) と正方形 (1辺18.6cm) の台紙 (いずれも白色で、筆者が採寸し、カットしたものを使用)、27色折り紙、はさみ、糊。被験者に、台紙を円か正方形どちらかと、27色の折り紙から使いたい5色を選択してもらい、自由に切り貼りして構成してもらった (色彩コラージュ)。完成後、色彩コラージュのテーマと、使用した5色のイメージを尋ねた。調査場所は、緋工房の中庭で、ひとつのテーブルを3～4名が囲み、複数同時の個人作成を行った。

なお、作成者への色彩コラージュへのなじみやすさを考慮し、折り紙5色という選択数は、マヤの基本5色という色数にそろえ、台紙面積を普段見慣れたウィピールの首部分の大きさにあわせた。ウィピールの首回り部分は、リディア・ドローレス・カルラ (2017) の説明からも、非常に大事な部分であり、ウィピールに用いられる色糸にもマヤの基本5色が使われることが多い指摘もあり、色彩コラージュ作成の構成根拠とする。

被験者：4歳から13歳までの緋工房職人の子どもたち、男子9名 (4歳1名P、5歳1名Q、7歳1名N、8歳1名M、9歳1名L、10歳2名K、O、11歳

1名J、13歳1名I)、女子7名 (5歳2名E、F、6歳1名C、7歳3名A、B、H、10歳1名D)、計16名。

#### 色彩コラージュの特徴

アティトラン湖畔に住む子どもたちは、他の地域 (都会化の進む地域や山間部) に比べて、細かな造形に、物語性のあるコラージュ表現が特徴的であった。具体的な表現として、日常の風景や事物を切貼りして構成する特徴に、太陽や雲、虹が散見される。特に、他の地域の表現には見られない「虹」の表現が特徴的である。作品に関し、感想やコメントを求めると、「虹のお話だよ」「虹が湖から出てくるお話」と言うものであった (表1)。

作品の全体的印象として、水平方向から見渡せる風景構成的表現が多く、物理的にも心理的にも全体像を眺められるような視野の広さを感じた。

#### 色

年齢順に全作品を眺めると、5～7歳にかけて男女ともにオレンジ・黄・金・銀の4色が多用されている。5歳児の男子Qと女子Fは、選択色が、金・銀・オレンジ・黄・赤と、まったく同じであった。5歳女子Eも、赤を除いた金・銀・オレンジ・黄は、F、Qと一致している。7歳児 (男子N、女子B) の人物表現においては、ともに胴体がオレンジで腕が金色、四足動物の向きは違うが、胴体がオレンジで頭部が金色と一致している。7歳女子A、Hは、同年齢のB、Nとは、金・銀が一致するものの、他の色は柔らかなパステル調を選択している。10歳以上になると、男女ともにトーンの濃い紫や黒を選ぶようになり、その中にポイントとして金・銀がはめ込まれる印象である。

全体に、年齢が若いほどパステル調、光輝く金・銀・オレンジ・黄が主張した構成になっているが、年齢が上がるにつれて、落ち着いた色調をベースに、金・銀を取り入れている特徴が見られる。

#### 形

平均して、男女ともに7歳前後よりアイテムの形状がはっきりしてくるように見受けられる。8歳までは、若干あいまいさを感じる形状であったり、微小なアイテムの並列 (A、H) などが見られるが、9歳以降は、上下構造がはっきりし、大地を作って足場を固めたり (K、L)、物語の登場人物同士の関係性が見られたり (D、L、O)、形状のはっきりしたアイテムで抽象的な概念を持つタイトルを象徴するアイテム構成の作品に仕上げたり (I、J) と、作品が変化していき、全体のまとまり感が持てるようになるのは、9歳以降であるようだ。

#### 天象表現と蛇

最も多かったのは、「太陽」であり、男子6名 (I、J、K、L、M、N)、女子3名 (A、B、C) 計9名が表現している。使用した色合いは、金・銀・オレンジ・黄

表1 Santiago Atitlánの子どもたちの色彩コラージュ（年齢順）

	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	13歳	
男子						開閉式扉  閉	 K 「1人の人が歩いているところ」			
	 P 「TVがいっぱいある中に塔がたっている」	 Q 「ラクダの体と芋虫がいる」		 N 「王子様のお話」	 M 「宇宙」		開  L 「お城に1人で住んでいる女の子の話」	 O 「大地と世界」	 J 「世界」	 I 「平和」
女子		 F 「四角の中にハートがあって、ハートを守っている」	 C 「湖の大きい魚と杖と蝙蝠と蛇が皆を守っている」	 B 「家族」				 D 「蝶々のお話」		
		 E 「虹のお話」		 A 「自分の生活」						
				 H 「翼の話」						

色である。また、女子2名(D、E)、男子2名(I、O)が4～5色用いて「虹」表現している。使用色には、金3名(D、E、I)、銀4名(D、E、I、O)と、金銀が入るのが特徴的である。また、太陽と虹のある作品の中には、「蛇」が登場しているのも特徴的であった(C、I)。

一般的に、グアテマラの気候は、四季による変化はなく、雨季と乾季の2つに区別される。5・6月ごろから11月ごろまでが雨季で、日に一回は激しい雷雨に見舞われる。筆者自身も、4～5日ほどのSantiago Atitlán滞在中(2014、2017)に、何度とスコールにあい、その後に虹を見ている。それだけ、土地の者たちにとって、虹は日常的に身近な存在であり、子どもたちの色彩コラージュでの表現にも反映されると理解できる。この雨は、植物にとって恵みの雨ともなりうるが、山道などにとっては川となり激流をなす。「マヤの人達は、天象・気象の恩恵と危険を肌で感じ、それを織物の文様に現わしている。つまり、太陽、月、稲妻、雨、虹、波、渦などが文様化あるいはシンボル

化されている」(赤池、1998)。古代マヤからの世界観が「口伝」により根強く受け継がれており、その伝えられた神話や伝承文様がウィピールに表され、植物文様・動物文様にシンボル化されたり、色彩を通して展開されることが多いと赤池(1998)は説く。まさに、「織物について語るのとは、土地について語るのと同じ」(Otzoy、1992) ことが見て取れる。

Santiago Atitlánの湖畔には、2蛇を模した柵がある(図6)。双頭の蛇、ケツアルコアトルを象徴するものであろう。村の人々の言い伝えでは、「アティトラン湖から虹が立ち上がる」「湖は虹の出るところ」「アティトランは、虹の登るところ」といわれる。

筆者は、2017年8月31日に、女性シャーマンの儀式に立ち会った際、聖なる祈りの場において、儀式の際に、洞窟の壁に祀られている像の蝋燭より、図7のような2頭の蛇型の炎が天に向かって伸びる現象をカメラに収めることが出来た。シャーマンたちの言によると、「魂が浄化される際、炎をかたどって、蛇がらせん状に天に昇っていく」(ドロレス、エドガーら、



図6 アティトラン湖畔の柵 (筆者撮影)



図7 儀式中に起こった蠟燭の炎に宿った2蛇  
(Cerro de Oro 2017年8月31日 筆者撮影)

2017) という。蛇は、マヤの人々にとって、とても大切なもの、神聖な存在であり、子どもたちの中にも、特別な存在として根付いていることも感じられる。

#### テーマ・モチーフ

作品のテーマは、大別して、日常的なものと物語的なもの、その中間に位置付けられそうなものに分かれた。

日常をあらわしたのものには、A「自分の生活」、B「家族」、O「大地と世界」など、「世界」(J、O)といったタイトルの大きなテーマに思えるが、表現されたものは、具体的な日常生活場面に近く、「自分を巻き巻く世界」と置き換えられそうである。また、M「宇宙」という表現も、実際に夜見える風景の再現様で、日常に含まれると思われる。男子の中には、K「1人の人が歩いているところ」、P「TVがいっぱいある中に塔がたっている」と、情景を説明しているものもあった。

明らかに、日常というよりは、ストーリー性のある物語的なものを表しているものは5名あった。男子1名に対し、女子4名と、明らかに女子のほうが多い表現となった。日常を表している男子2名：K「1人の人が歩いているところ」、P「TVがいっぱいある中に塔がたっている」という表現と比較すると、これらの分類には、「～の話」とタイトルがつけられている。女子のH「翼の話」、D「蝶々の話」、E「虹のお話」のように事物(人物以外)を主人公としたもの、男子のL「お城に1人で住んでいる女の子の話」、女子のN「王子様の話」のように人物を主人公としたものと2種見られる。

これら「日常」と「物語」の間に位置するものに、女子のF「四角の中にハートがあって、ハートを守っている」、C「湖の大きい魚と杖と蝙蝠と蛇が皆を守っている」、男子のQ「ラクダの体と芋虫がいる」というものがある。女子2名は、5～6歳で、「～の話」というタイトルに相当するとも考えられるが、この2タイトルの共通は、「～を守っている」という表現である。とくにC「湖の大きい魚と杖と蝙蝠と蛇が皆を

守っている」は、この地にまつわる伝承に近いものと思われる。アティトラン湖の伝説として、大きな魚や蛇がこの地を守っているという言い伝えがあり、また、杖や蝙蝠も、多くの伝承の中に登場すると言われている。古いマヤの自然崇拝を色濃く残している文化の中に身を置き、子どもたちの中にも、深く浸透しているものと思われる。「～守っている」表現が5～6歳女子だけに見られているが、7歳女子になるとB「家族」、A「自分の生活」といった現実のテーマや、H「翼の話」といった物語表現に分かれていき、表現の変化の時があるようである。就学を迎える7歳あたりでより現実的になることや、現実とファンタジーの区別が付き始めるあらわれかもしれない。この点に関しては、事例数を増やすとともに聞き取り調査を続ける必要がある。

#### 登場人物

作品に主人公的人物が形作られているのは、男子：J、K、L、N、Oの5名、女子：Bの1名と、男子のほうが多い。女子の多くは、周りの情景を細やかに1つ1つ形作って配置する傾向が見られたが、これは、ウィピールを身につけるという行為、つまり、主たる自分という存在に、周りのすべてのものを纏うという形で視覚化する行為との共通性を感じる。それに対し、男子は、日常において、すでに民族衣装は身につけておらず、衣服との関連は薄く、形象化した自己像を視覚化表現することが可能なのではなかろうか。女子で唯一人物を形作ったBも、タイトル「家族」であり、人物はズボンを着用していることから、男性を表現したと考えられ、自分自身の表現ではないことが推測できる。この男性人物も、自身をとりまく周りのものとして作品に表れている可能性が高い。人物表現についての男女差を解く鍵が、民族衣装の纏いとの関係になるのではと予想され、今後、さらなる探究を試みたいと思う。

#### ウィピールとコルテとの関係

Santiago Atitlánのウィピールには、古来、この地

の自然に生息する多種の鳥が刺繡されてきた。色彩コラージュにも、鳥の表現を期待したが、今回の調査では、1例も表現されることがなかった。逆に、コルテの緋模様に表示された、人々の世界に近い世界が、色彩コラージュの中に展開されている。調査に協力してくれた子どもたちは、皆、緋工房の子どもたちではあったが、工房では、緋部門と、刺繡部門双方があり、緋のコルテ生地は男性が全工程を担い、刺繡は女性の仕事である。

色彩コラージュの構成を眺めると、表現されたアイテムは、コルテの緋模様に通項が見られ、構成に関しては、ウィピールの鳥刺繡の自由さに近い印象を受ける。また、台紙が円形である場合、上下構図を作り、コルテの緋模様の並びに近い印象を持つ。コルテの緋模様の並びは縦であるが、色彩コラージュ上では、台紙の形が変わっても、アイテムは横並びで、水平方向から見渡せる風景構成的表現が展開されている。表現の垂直—水平構造においては、垂直では視野を縦に切れ、枠づけられるのに対し、水平では、上下への空間は切られるものの、横への広がりもたらされる。織の世界も、幅が決まっておき（縦に切られる垂直構造）、縦には必要なだけ伸ばせるが、横への広がりには、布同士をつないで広げる必要がある。布と布をつなぐ刺繡（ランダ）であるグアテマラ特有の刺繡技術も存在する。

これより、色彩コラージュには、コルテの上下垂直構造を水平方向に置き換えて表現される可能性がみられ、アイテムには身の回りの物理的・精神的なものが映し出され、ウィピールの自由構成などを総合的に用いた表現であるように思われる。

#### 4. 色彩コラージュの可能性

コラージュは、もともと芸術療法の一技法としての位置づけであったが、改めて1987年の森谷（1988、2012）の箱庭療法との関連の発見にコラージュ療法としての意識化が始まり、さまざまな実践家・研究者において研究発表されてきたが、色彩のみのコラージュ研究は数少なく（山根・田中、2003、矢野・小坂、2008、山根、2013、牧田、2017）、交差文化的研究は、まだ行われていない。色彩コラージュ自体の研究の難しさもあり、分析自体も確立されていない。さらに、国際比較となつては、色彩に関する文化差も大きく、また、コラージュ表現の個性化の強さから、量的問題だけでは解決できない。今後、ひとり一人に、よりコミットしたアプローチを行うとともに、作者の生きる世界の理解を、物理的にも心理的にも深めていく必要がある。

この文化を越えてのコラージュ表現を求める場合、文化に即した素材提供も課題となるが、雑誌等も普及

のままならない土地に、異物を持ち込むことはそぐわない。グアテマラ・マヤの民族衣装にあらわされた古来文様としては、具象的なものよりも抽象的な幾何学模様が多い点からも、コラージュを用いてのマヤへのアプローチは、色彩コラージュが妥当と考えられる。今後、さらに調査を続け、理解を深めたいと思う。

#### 文献

- Ann Hecht 原著 近藤 修 翻訳 (2003) textiles from Guatemala グアテマラの織 (大英博物館ファブリック・コレクション—Fabric Folios シリーズ) デザインエクステンション
- 赤池照子 (1998) 解説—衣装のできるまで— III五色に燦く文様と色 「五色の燦き グアテマラ・マヤ民族衣装」 東京家政大学博物館
- ドロレス (2017) シャーマン儀式に関する聞き取り Santiago Atitlán
- エドガー (2017) シャーマン儀式に関する聞き取り Quetzaltenango
- カルラ (2014/2017) Casa de Arte レクチャー
- 小泉潤二 (1994) 境界を分析する —グアテマラの場合— (黒田悦子編著『民族の出会いのかたち』) 朝日選書
- 小泉潤二 (1996) 現代マヤの衣装と政治：グアテマラの場合 大阪大学人間科学部紀要 22 319-340
- リディア (2016、2017) 取材・聞き取り
- 森谷寛之 (1987) 心理療法におけるコラージュ (切り貼り遊び) の利用 第126回東海精神神経学会
- 森谷寛之 (1988) 心理療法におけるコラージュ (切り貼り遊び) の利用 精神神経学雑誌、90 (5)、450
- 森谷寛之 (2012) コラージュ療法実践の手引き その起源からアセスメントまで 金剛出版
- 牧田浩一 (2017) 大学生における「色彩コラージュ法」の特徴 北星学園大学社会福祉学部北星論集 (54) 103-113 北星学園大学
- 落合一泰 (2004) 文化を受け継ぐ—マヤ民族学への誘い 八杉佳徳編『マヤ学を学ぶ人のために』世界思想社 165-187
- Otzoy, Irma (1992) "Identidad y trajes mayas." Mesoamérica 23 : 95-112
- 桜井三枝子 (2006) グアテマラを知るための65章 エリア・スタディーズ 明石書店
- 実松克義 (2016) マヤ文明：文化の根源としての時間思想と民族の歴史 現代書館
- 志村ふくみ 鶴見和子 (2004) いのちを纏う 色・織・きもの思想 藤原書店
- 矢野博幸・小坂浩嗣 (2008) 図画工作科の授業が児童に与える心理的効果：色彩コラージュを用いて 鳴門生徒指導研究 18 32-44 鳴門教育大学
- 山根和子 (2013) 中学校現場での色彩コラージュの実践 (日本コラージュ療法学会第4回大会シンポジウム教育現場におけるコラージュの理解と活用) コラージュ療法学研究 4 (1) 67-69
- 山根和子・田中雄三 (2003) 「色彩コラージュ法」開発の試み 遊戯療法学研究 2 (1) 60-70

(2019年10月30日受理)